

コンテンツから迫る授業が 知識・技能も豊かな人間性も育む

関西大学 外国語学部 教授 田尻悟郎

2021年4月から全面実施となる中学校の新学習指導要領では、語彙数や文法事項の増加といった学習内容の変更がある。しかし、そこだけに気を取られずに、教科書の「コンテンツ」を掘り下げた授業で生徒の意欲を引き出し、国際社会に貢献していく際のコミュニケーション・ツールとなる英語力をしっかり育成していこうと、関西大学の田尻悟郎教授はエールを送る。

田尻教授からのメッセージ

- 1 なぜ、英語を学ぶのか。原点に立ち返ろう
- 2 教科書本文を通して伝わるメッセージに関連した、生徒の関心を引く話題で、授業に引きつける
- 3 人間教育の視点からも授業を見取り、目指す英語教育を具現化できるよう助言する



たじり・ごろう 兵庫県神戸市と島根県の公立中学校で26年間、英語科教員として教壇に立つ。2007年4月から現職。2017年度から2年間、関西大学中等部・高等部の校長も務めた。専門分野は、英語授業実践学、英語科教科教育法。動画配信サイト「YouTube」の関西大学公式サイトで、中高生向け英語発音教材を配信中。

英語教育の目標

世界を見て英語教育を捉え 日々の授業を考えよう

— 中学校で長く英語を指導された経験から、新学習指導要領の内容をどのように捉えていますか。

田尻 新学習指導要領に示されている中学校の英語教育の趣旨は、これまでと何ら変わりありません。中学校で扱う語彙数が増え、高校の文法事項の一部が中学校の学習範囲に含まれるといった改訂がありましたが、「英語によるコミュニケーション能力の育成を意識し、言語活動に重点を置く」という指導方針は改訂前と同様です。学校現場に問われているのは、「英語を使って何ができるようになるか」を明確にした授業の実践です。

いま一度立ち戻りたいのは、「何のために英語を学習するのか」という原点です。アメリカで起きた大統領

選挙を巡る混乱、イギリスのEU離脱、中国の台頭、さらにコロナ禍と、世界は大きく揺れています。それらの動向は、グローバル化が急速に進展する時代にあって、日本に住む私たちにも深く関係します。

私たちは、多様な国や地域が共存する国際社会に生きています。その一員として社会に貢献するために、地球的視野に立って主体的に行動する態度や能力の育成を目指すのが「国際教育」です。その土台として、異文化への理解を深め、尊重・共生できる資質・能力やコミュニケーション能力を育むのが「国際理解教育」です。そして、国際理解教育の中でコミュニケーション能力を育む役割を担うのが、「英語教育」なのです。そうした英語教育の趣旨を理解していれば、育成すべき英語力とは他者とのコミュニケーションを前提としたものとなり、おのずと言語活動に

重点を置いた指導になるはずですが。

世界を見て、授業を考える。英語教育に携わる教員が、決して忘れてはならない視点です。

—そうした英語指導の実現に向けて大切な点を教えてください。

田尻 新学習指導要領では、外国語科に3つの目標が設定されています。私なりに要約すると次の通りです。

- ①外国語（英語）の知識・技能の習得
- ②コンテンツの理解
- ③コミュニケーションの素地の涵養

3つをバランスよく身につけてこそ、英語は生きて働く力になりますが、現状では、①の知識・技能の習得を重視した授業が多いと感じます。

言語は、人とのかかわりの中で用いられるもので、言葉を受け取る他者がいて初めて成立します。どういった言葉を使えば理解してもらえるのか（知識・技能）、相手が何を知りたいと思っているのか（コンテンツ）、

読み手や聞き手に配慮してどう伝えればよいのか（コミュニケーションの素地）といったことをすべて連携させながら高めていく必要があります。

そのように見ていくと、授業でペアワークやグループワークを行うことがいかに重要なかが分かるのではないのでしょうか。クラスは、一人ひとりが異なる考えを持つ多様な他者が共存する、世界の姿そのものです。普段あまり話さない人とも、授業では、どのように会話を進めていくか、どう言えばよいか、話の着地点をどう見いだすかと考えながら対話をします。それは、まさしく相手を踏まえて最適な言葉を選ぶ練習になるはずです。

言語活動を実践する鍵

教科書のコンテンツから 生徒の心にアプローチする

——言語活動に重点を置くと、高校入試に対応できる英語力の育成とは両立させることが難しいという声も聞きます。

田尻 高校入試では、教科書の学習範囲の定着が重要になりますが、その際に教科書を使って言語活動を行うことは十分に可能です。教科書のコンテンツは、中学1年生では登場人物の日常会話が中心で、中学2年生で読み物教材が増え、中学3年生で政治や宗教などに関連するエッセーも取り上げられます。授業では、文法事項の習得から始めるのではなく、まず「コンテンツ」からアプローチしてみてください。コンテンツとは、教科書の本文が伝えようとしているメッセージのことです。コンテンツの背景にあるものや関連する話題など、生徒が関心を持つような情報を提示して、「もっと知りたい」という学びの意欲を引き出すのです。

知識・技能の定着には繰り返し

重要ですが、生徒が学習の必然性を感じない状態で知識・技能だけを詰め込み、暗記をさせても、学ぶ意欲は湧かず、定着にはつながりません。「知りたい」「面白い」と思ってこそ、生徒は夢中になって繰り返し取り組みます。ですから、授業ではまず単元の内容に関心を持たせた上で語彙や文法などを指導し、単元の内容について自分が考えたことを表現する言語活動を通じて知識・技能を習得させるようにすれば、高校入試で合格点を取る指導とは両立できます。

——コンテンツからアプローチするのは、どういったことでしょうか。

田尻 例えば、「公民権運動」を扱っている単元の場合、生徒もニュースで見聞きした“Black Lives Matter”^{*1}を取り上げることが考えられます。アメリカでは市民の平和的なデモの一方で暴動や略奪が起きることがあり、その要因が教科書に書かれた歴史やグローバル化した現代社会にあることなどを知れば、生徒の中で教科書の内容が実感を伴ってつながります。そうすれば、教科書の英文が単なる記号ではなく、意味のある言葉として受け止められるようになるでしょう。

生徒の心を引きつけるのは、コンテンツの中身です。教科書本文の一つひとつの内容がいかに興味深く、自分にも関係する内容であるかを伝えましょう。英語の歌や映画、ニュースなどから生徒が引きつけられそうな情報を探して提示し、外国の人とやり取りしたいと思わせれば、生徒の心に火がつけます。そのために、目の前の生徒が何に関心を持っているかをもっとつかむ必要があります。

新学習指導要領の総則には、教科書横断型学習の重要性が指摘されていますが、英語の教科書はまさに教科書横断型のコンテンツになっています。英語の学習を通して、同じ景色を違う窓から見ることにつながるのです。

2021年度の指導の留意点

習熟には音読が重要 ICTも有効に活用を

——反復練習の重要性を指摘されましたが、学習内容が増える4月からは、反復練習が一層重要になりそうです。

田尻 言語学習の基本的な流れは、次のようになります。

①理解 キーセンテンスや教科書本文の意味構造を理解する。

②暗記（習熟） キーセンテンスや教科書本文の音読、筆写、黙読、聞き取りを繰り返して習得する。

③応用 キーセンテンスや教科書本文を応用して会話文を作ったり、続きを書いたりする。

①に挙げた、キーセンテンスや教科書本文の意味構造を習得していなければ②暗記や③応用はできませんから、①理解は重要です。また、②暗記のための音読も重要な活動です。ただ、「指導なき音読」は、英語力を上げません。音読は、単語レベルでは、「文字の音声化」「アクセント」、文レベルでは、「ストレス・ピッチ」「イントネーション」「区切り」「感情移入」、そして「連結・同化・脱落・崩れ」という7つの要素が複合的に展開される活動です。その7つを指導せずに音読させれば、ネイティブの音読と乖離が生じ、リスニングができない状況が生まれてしまいます。

最近、音読の正しさを測るソフトウェアが開発されていますので、それらを使えば生徒の音読の正確さが分かります。簡易的なチェック方法には、タブレット端末やスマートフォンのメモ機能の活用が挙げられます。英語を読み上げて音声入力し、それが正しい英語として文字化されれば、発音は正しいというわけです。

また、文字を音声化するだけの音読では、英語力は向上しません。文字・意味・音声三位一体となっていな

*1 アメリカで始まった、アフリカ系アメリカ人などに対する近年の人種差別抗議運動のこと。

いからです。サイトトランスレーション*²や「語順表指さし音読」など、意味を音声化する音読を加えましょう。

— ICTを有効活用することが英語力のアップにつながるのですね。

田尻 学習の進度は生徒一人ひとり

で異なります。最初は同じプリントを使ったとしても、それが終わった生徒は先に進める教材が、できなかった生徒は前に戻って学習できる教材があれば、どの生徒にとっても有意義な授業になります。そうした教材

を常設する専用の英語教室を校内に用意できればよいですが、それが難しくても、デジタル教材が個別最適化された学びを後押ししてくれます。

生徒同士の学び合いも、生徒個々の習熟度に応じた学習となり、学力上位層が下位層を引き上げることでクラス全体の英語力の底上げにつながると思います。

図 授業づくりと授業見学の視点

教科指導に関する観点 (黒色のペンでメモ)

- 1 活動は知的で楽しさがあるか
- 2 発問・指示が効果的であるか
- 3 教材や教具は、児童生徒を引きつけているか
- 4 教材や教具を、適切に使用していたか
- 5 教員は、児童生徒が分かっていないところやできていないところを見つけ出しているか
- 6 児童生徒が分かるようになるため、できるようになるための的確なアドバイスや支援を教員がしているか
- 7 時間配分は適切か
- 8 説明は効果的か
- 9 板書は効果的か
(板書の目的)
 - ・教員が重要だと思ふ情報を伝える (プリントで済ますことができるし、写させたものをあとで使わないと意味がない)
 - ・解答・解法を共有する (プリントで済ますことができるが、答えにたどり着くステップを1つずつ視覚的に確認する価値はある)
 - ・児童生徒の意見を整理し、次の発想を促す (プリントでは済ませられない)
- 10 教員の知識・技能にミスはないか
- 11 授業の結果、児童生徒の技能や学力の向上が見られたか

全教科に共通する指導技術 (青色のペンでメモ)

- 12 指名に意図が感じられるか
- 13 全体発表は本当に必要か
(全体発表の目的)
 - ・解答・解法を共有する (聞き手が「なるほど、そうやるのか」とか「あった！」と思う)
 - ・異なる意見を鑑賞する (聞き手が「確かにそれも正解だ！」と思う)
 - ・児童生徒が元の活動に戻りたくなる (聞き手が「そうやればいいのか、先生、もう1問出してください」とか、発表を聞いて「あ、もう言わないで、先生、続きをやっていいですか」と言って活動に戻ろうとする)
- 14 個々の児童生徒の活動の時間が確保されているか
- 15 学習様式の選択は正しかったか
- 16 教え合い、学び合いのための仕かけがあったか
- 17 上位層が満たされていたか
- 18 上位層が説明を補足したか
- 19 教員が我慢しているか
- 20 児童生徒の間を回る時、意図を持って回っているか
- 21 学校でしかできないこと、チーム・ティーチングでしかできないことをしているか
- 22 教員が児童生徒から学ぼうとしていたか

生徒指導に関する観点 (赤色のペンでメモ)

- 23 児童生徒一人ひとりをしっかり観察しているか
- 24 児童生徒の互助システムはつくられているか
- 25 しつめるべきことを妥協していないか
- 26 児童生徒のつぶやき、発言、行動に気づき、的確に対応しているか
- 27 児童生徒が全員見られるように、視野を広くして観察しているか
- 28 児童生徒は教員を受け入れ、授業に期待し、教員を支えようとしているか

教育委員会の役割

ポイントを押さえた授業見学で核心を突いた助言を

— コロナ禍で、教育委員会は学校への支援が思うようにできません。限定的な学校訪問やリモートで、どんな支援ができるのでしょうか。

田尻 限られた機会での確に支援するには、ポイントを押さえた授業見学が必要です (図)。特に大切にしたいのは、人間教育の中の英語教育として包括的に捉える視点です。英語の授業は、英語の知識・技能のみを習得する場ではありません。生徒が社会で活躍する人物となるように、得意や長所を自覚させ、豊かな人間性を育もうとして授業をする教員と、教科書の記載事項だけに意識が向いている教員とでは、授業の質が異なります。その視点で授業を見れば、核心を突いた助言ができるでしょう。

指導助言を直接行えない場合は、図のリストを学校に渡し、教員同士でチェックし合うだけでも効果的です。

近い将来、知識・技能の指導や学習評価は、AIが担うようになるはずですが、そうした時に教員がすべき役割は、生徒が自分で学び続けられるように、寄り添って励まし、学習の仕方をアドバイスする「コーチング」だと考えます。それは今でも既に求められていることです。生徒を伸ばすのが教員の仕事です。そこに力を尽くす先生方を、私も支援していきます。

田尻教授のウェブサイト「田尻悟郎の Website Workshop」には、上記に加えて、田尻教授が実践・蓄積してきた指導のヒントが紹介されている。 * 田尻教授提供資料を基に編集部で作成。

* 2 英文を、意味のかたまりごとに区切り、前から訳していくこと。